

明・景泰帝の諡號について (6)

滝野 邦雄

③正月壬午（十七日）奪門

英宗の立場から書かれた「實錄」では、奪門の変をつぎのようにのべる。

天順元年正月壬午日（十七日）、上（英宗）復して皇帝の位に即く。時に武臣の總兵官太子太師武清侯の石亨・都督の張軫等と文臣の左都御史の楊善・左副都御史の徐有貞等と内臣の司設監太監の曹吉祥等は、景泰皇帝の疾みて起きる能わず、中外の人心、歸誠（まごころを寄せる）して上（英宗）を戴くを知る。乃ち是の日の昧爽（払暁）に於いて、共に兵を以て上（英宗）を〔軟禁されていた〕南宮より迎う。上（英宗）辭讓すること再三なり。〔石〕亨等 固より請う。乃ち起き輅に陞り、東華門より入りて奉天門に至り、御座に陞る。文武の群臣 入りて五拜三叩頭の禮を行なう。上（英宗）曰く、「卿等 景泰皇帝の疾有るを以て、朕（英宗）を迎えて復位せしむ。其れ各々舊に仍（よ）りて心を用いて辦事し、共に太平を享けん」と。群臣 皆な萬歳を呼びて、朝退す。上（英宗）文華殿に御し、徐有貞に翰林院學士を兼ね、内閣に於いて機務に參與するを命じ、内閣の臣の少保兼太子太傅戸部尚書華蓋殿大學士の陳循等を召して之に面諭す。遂に〔陳〕循等と〔徐〕有貞と俱に文華殿左春坊に就きて宣諭を草するを命ず。頃之、進呈さる。上（英宗）覽畢りて以て禮官に付し、午門の外に於いて開讀す。其の文に曰く、「上皇帝 文武の群臣に〔以下のように〕宣諭す。朕（英宗）南宮に居ること今已に七年なり。天和（氣力）を保養（維持）し、安然自適たり。今、公・侯・伯・皇親及び在朝の文武群臣 咸な宮門に赴きて、奏言するに當今の皇帝（景泰帝）不豫にして、四日視朝せず、中外危疑し以て人心を慰服する無し。〔そこで英宗に対して〕再三に固く皇帝の位に復即するを請う。朕（英宗）辭すれども獲ず。〔また〕母后の諭令（命令）に於いて勉めて群情に副え以て宗社を安んじ、以て天下の心を慰めよ、と請う。就きて是の日を以て即位す。禮部 其れ日を擇び改元し、詔もて天下に告げよ」と。群臣 宣諭（告知）を聴き畢り、遂に各々朝服を具し以て入りて奉ず。上（英宗）奉天殿に登り、即位の禮を行なう。時に日 已に正午なり（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月壬午（十七日）」条）。

天順元年正月十七日、上（英宗）は皇帝に復位された。武臣の總兵官太子太師武清侯の石亨・都督の張軫等と文臣の左都御史の楊善・左副都御史の徐有貞などと内臣の司設監太監の曹吉祥などが、景泰皇帝が病気で起き上がれず、内外の人々がまごころを寄せて、上（英宗）を皇帝

に擁立したいと思っていることを知った。そこで、この十七日夜明けに、兵を率いて、上（英宗）を軟禁されていた南宮からお迎えした。上（英宗）は、復位されることを再三にわたって辞退された。しかし、石亨などが強く願い出た。そこで、上（英宗）は輅（天子用の車）にお乗りになり、東華門から入って奉天門にいたり、玉座にお座りになった。文武の臣が入って、五拜三叩頭の禮を行なった。上（英宗）は、「皆は景泰皇帝が病気になったことから、朕（英宗）を迎えて復位させた。それぞれがもとのまま心を尽くして仕事にはげみ、ともに太平を享受しよう」とおっしゃった。群臣はみな万歳を唱えて、退朝した。上（英宗）は、文華殿に臨まれて、徐有貞に翰林院學士を兼ねて内閣で政務に参与することをお命じになった。内閣の少保兼太子太傅戸部尚書華蓋殿大學士の陳循などを召し出して、直接訓示を出された。そうしてから、陳循等と徐有貞に文華殿左春坊で詔勅を書くことをお命じになった。しばらくして、それが提出される。上（英宗）はご覧になって、禮官に下されて、午門の外で読み上げさせた。詔勅には、上皇帝（英宗）は、つぎのような諭を下すとあり、そこには、「朕（英宗）は、南宮にすでに七年も居た。氣力を維持し、落ち着き心のままに楽しんでいた。いま、公・侯・伯・皇親や朝廷の文武百官が、宮門にやってきて、現在の皇帝（景泰帝）が病気となり、四日も政務を執られなくなりました。内外ともに懷疑的となり、人々の気持ちをいたわり納得させられなくなりました。[そこで、英宗に対して]再三にわたって強く皇帝に復位することを願い出ます、と奏上した。朕（英宗）は、辞退したけれども理解は得られなかった。また、母后も諭令（命令）で、群臣の願いに沿い、国家を安定させ、天下の人々の気持ちを安心させるようにと申し出てこられた。そういうことから、この日に即位する。禮部は、日を選んで改元し、天下に告げよ」とあった。群臣は告知を聞き終わると、朝服を整えてつつしんでうけたまわった。上（英宗）は奉天殿においでになり、即位の儀礼を行なわれた。この時、時間は正午になっていた、という。

武臣の石亨・張軫と文臣の楊善・徐有貞や内臣の曹吉祥などが、景泰皇帝が病気で起き上がれなかったために、英宗に再度帝位についてもらったと伝えるのである。

英宗がふたたび帝位につくと、すぐに景泰朝における外朝・内朝の実力者たちが逮捕される。「實錄」はつぎのようにいう。

〔天順元年正月壬午（十七日）〕命執少保兼太子太傅兵部尚書于謙・少保兼太子太保吏部尚書謹身殿大學士王文を班内（宮中で拝謁する列）に執え、司禮監太監の王誠・舒良・張永・王勤等を禁中に執え、錦衣衛の獄に出付す。時に〔于〕謙等 甫めて宣諭を聴き畢るなり（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月壬午（十七日）」条）。

そして、六科給事中は、王文・于謙たちを糾弾する。

甲申（十九日）、六科給事中〔以下のように〕劾（弾劾）す。王文・于謙、内は王誠・舒良・張永・王勤と結ぶ。外は陳循・江淵・蕭鎡・商輅等の朋奸（徒党を組んで悪事を行な

う者) 惡黨 (惡党・凶徒) と連なりて、景泰 (景泰帝) に逢迎 (迎合) し、儲君 (已に皇位継承が確定している人) を易立し、[皇太子の変更に反対した] 汪后を廢黜し、賣權 (天子の權威を利用する) して鬻爵 (賣位賣官) し、弄法舞文 (法を悪用して不正をはたらく) す。廼者、景泰 (景泰帝) 不豫なり。[王] 文・[于] 謙・[王] 誠・[舒] 良等は「禍心を包藏^①」, 陰かに異圖 (謀叛の意圖) 有りて、外藩を召して入れ大位 (帝位) を繼がしめんと欲す。事 傳聞なりと雖も、情實 (真相) 顯著なり。且つ王文の黨の古鏞・丁澄、于謙の黨の項文曜・蔣琳及び俞士悅・王偉の輩、皆な儉邪 (奸邪) 諂佞にして、國の大■ (一字不明) なり。乞うらくは、[于] 謙・[王] 文等を將つて明正典刑 (法に照らして極刑に処す) し、[陳] 循等は其の一二を誅し、餘は悉く之を遠方に屏 (放逐) し、以て不臣の戒と為せ」と。是に於いて十三道も亦た「俞士悅等 貪刻 (貪欲で刻薄) 儉佞 (邪惡でへつらう) なり」と劾 (弾劾) す。并せて「右通政の殷謙 于謙の黨と為り、侍郎の張敏・通政使の欒憚 昏耄 (耄碌) して尸位 (いたずらに禄を食む) なり、侍郎の宋琰・少卿の陳贊 黨附して進身す」と劾 (弾劾) し、俱に之を黜逐 (罷免・降職) するを乞う。上 (英宗) 曰く、「汝等の言う所は是なり。但だ朕 (英宗) 初めて復位し、首惡 已に就擒さる。餘は姑らく之を置きて以て人心を定めよ」と (『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月甲申 (十九日)」条)。

①『左傳』昭公元年に「小國無罪，恃實其罪，將恃大國之安靖己，而無乃包藏禍心以圖之（小國 罪無し，實に其の罪を恃むは，將に大國の己を安靖にするを恃まんとす，而して乃ち禍心を包藏し以て之を圖ること無からんや）」。

甲申 (十九日)，六科給事中は、「王文・于謙を，内廷では宦官の王誠・舒良・張永・王勤と結託し，外廷では陳循・江淵・蕭鑑・商輅などの朋奸惡黨と一緒にあって，景泰 (景泰帝) に逢迎 (迎合) し，皇太子となっていた英宗の皇子 (後の憲宗成化帝) を自分の皇子と取り換え，皇太子の変更に反対した汪皇后を景泰帝の皇后の座から引きおろし，皇帝の権力を利用して，賣位賣官を行ない，法を悪用して不正をはたらいた。また，前に景泰 (景泰帝) が病氣となられた時，王文・于謙・王誠・舒良たちは，下心を隠し持ち，ひそかな叛乱の意図があり，外の王府を召し出して，帝位を繼がせたいと考えた。この事は，伝聞ではあるが，真相ははっきりしている。その上，王文の党派の古鏞・丁澄や于謙の党派の項文曜・蔣琳・俞士悅・王偉などは，みな邪惡で媚び諂い，国家の大惡党である。于謙・王文などを法に照らして極刑に処し，陳循などはその党派のひとりふたりを処刑し，そのほかはすべて遠方に放逐して，不臣 (臣節を守らない官員) の戒めとしてももらいたい」と弾劾した。そして，十三道もまた「俞士悅などは，貪欲で刻薄，さらにまた邪惡で媚び諂っている」と弾劾した。あわせて，「右通政の殷謙は于謙の党派に連なり，侍郎の張敏・通政使の欒憚は耄碌していたずらに禄を食んでおり，侍郎の宋琰・少卿の陳贊は派閥に頼って出世した」と弾劾し，すべて罷免・降職させることを願い出た。それに対して，上 (英宗) は，「汝等の申し出は正しいが，朕 (英宗) は復辟したてであ

り、首謀者はすでに逮捕されている。その他の者たちは、しばらくそのままにしておき、人々の気持ちを落ち着かせよ」という。

王文・于謙の罪状として、

◎内朝では王誠・舒良・張永・王勤と、外朝では陳循・江淵・蕭鎡・商輅などと結託した。

◎景泰帝に迎合して、皇太子を廢立した。

◎皇太子の廢立に反対した汪皇后を廢黜した。

◎権力を乱用して売官などの不正を行なった。

◎伝聞ではあるが、景泰帝の病気が重くなると、異圖（謀叛）をくわだて、外藩の王を招いて皇帝にしようとした。

を列挙する。

その翌日には、六科が陳循たちを王文・于謙たちと徒党を組んだとして弾劾する。また、十三道が、陳循たちは王文・于謙に加担し、外藩の王を招こうとしたことを糾弾する。ただし、殷謙・張敏・樂暉・宋琰・陳贊の五人には言及がなかった。上（英宗）は、陳循たちを合同で審理するように命じる。

〔天順元年正月〕乙酉（二十日）、六科 復た陳循等を劾し、〔陳循たちは〕王文・于謙等に黨比（徒党を組む）すれば、罪 大なり。正しく典刑（受刑）せんことを請う、と。十三道も亦た〔陳〕循等〔王〕文・〔于〕謙に黨し、外藩を迎えるの事を劾す。而して復た殷謙・張敏・樂暉・宋琰・陳贊の五人に及ばず。上（英宗）群臣に命じて〔陳〕循等を庭に雜治（合同で審理する）す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月乙酉（二十日）」条）。

こうして、二日後の二十二日に、英宗は、于謙・王文・王誠・舒良・張永・王勤を処刑し、その家産を沒收し、陳循・江淵・俞士悅・項文曜を辺境に送り鐵嶺衛軍の任に充て、蕭鎡・商輅・王偉・古鏞・丁澄を免職にして民とするように命じた。

〔天順元年正月丁亥（二十二日）〕命じて于謙・王文・王誠・舒良・張永・王勤を市に斬り、其の家を籍し、陳循・江淵・俞士悅・項文曜を謫して鐵嶺衛軍に充て、蕭鎡・商輅・王偉・古鏞・丁澄を罷めて民と為す。上（英宗）初め群臣に命じて〔于〕謙及び〔陳〕循等の罪を雜治（合同で審理する）す。群臣 言う、「〔于〕謙と〔王〕文・〔江〕淵と及び〔王〕誠・〔舒〕良・〔張〕永・〔王〕勤、景泰中、故^{もと}の都督の黃瓚と申同（ぐるになる）して邪議（よこしまな計画）を構成し、東宮を更立す。尋いで又た逢迎して汪后を黜く。〔陳〕循・〔蕭〕鎡・〔商〕輅 阻^{はば}む能わず、而して之に附^{つきしたが}う。〔于〕謙・〔王〕文 私黨を樹てんと欲し、〔項〕文曜・〔王〕偉・〔古〕鏞・〔丁〕澄を舉（推薦）して進用（任用）す。比（先ごろ）景泰皇帝の不豫（病氣）に因りて、在廷の文武の群臣 合せて皇儲を嗣立（繼承）せんことを請う。而して〔于〕謙・〔王〕文・〔王〕誠・〔舒〕良・〔張〕永・〔王〕勤 別に圖らんと欲することを意^{おも}いて、遲疑して決せず。已にして群情 皇上（英宗）を迎えんと欲

するを見て、乃ち不軌（叛亂）を為さんことを圖り、逆旅（叛逆の軍隊）を糾合、總兵等の官を擒殺し、外藩を迎立せんと欲す。〔陳〕循・〔蕭〕鑑・〔商〕輅・〔江〕淵・〔俞〕士悅・〔王〕偉・〔古〕鏞・〔丁〕澄・〔項〕文曜 俱に逆謀（叛逆の陰謀）を知りて、告言（告發）せず。〔于〕謙等は「謀反」^①に坐せば、凌遲處死とせよ。〔陳〕循等は「謀反」に坐して情を知りて故さらに縦てば（事情を知りながらわざと見逃す）斬（斬決）とせよ」と。章 既に上つられ、越えて二日にして乃ち是の命有り（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月丁亥（二十二日）」条）。

①「謀反」は、『明律』に極惡罪である十惡のひとつに挙げられている。

一に曰く「謀反」^{むほん}、二に曰く「謀大逆」^{ぼうはん}、三に曰く「謀叛（本國に背いて他國にしたがう）」^{ぼうはん}、四に曰く「惡逆」、五に曰く「不道」、六に曰く「大不敬」、七に曰く「不孝」、八に曰く「不睦」、九に曰く「不義」、十に曰く「内亂」。

『明律國字解』は、「謀反」を「天下をくつがえし、世を奪んとするを云うなり」と説明する。于謙・王文たちは、この「謀反」に該当するとして、処刑された。

于謙・王文・王誠・舒良・張永・王勤を市に処刑し、その家産を沒收し、陳循・江淵・俞士悅・項文曜を辺境に送り鐵嶺衛軍の任に充て、蕭鑑・商輅・王偉・古鏞・丁澄を免職にして民とするように命じた。上（英宗）は、はじめ群臣たちに于謙や陳循などの罪を共同で審理させた。群臣たちはつぎのようにいった。「于謙と王文と江淵それと王誠・舒良・張永・王勤は、景泰年間に故の都督の黃珙とぐるになって、よこしまな計画を練って、英宗の皇太子（後の憲宗成化帝）の皇太子の地位を景泰帝の太子に取り換えました。続けてまた景泰帝に迎合して、皇太子の変更に対峙した皇后汪氏を廢立しました。陳循・蕭鑑・商輅は、阻止することもなく、それに付き従いました。于謙・王文は自分たちの派閥を作ろうとして、項文曜・王偉・古鏞・丁澄を推薦して任用しました。先ごろ景泰帝がご病気となられたことから、朝廷の文武の群臣はいっしょに皇太子を立てることを願い出たのですが、于謙・王文・王誠・舒良・張永・王勤は別に考えるところがあって、ぐずぐずして決定しませんでした。そうして皆の気持ちが幽閉されていた英宗をお迎えしようとなったのを見て、叛乱を起こそうと計画し、軍を集めて總兵などの武官を捕らえて殺害し、外の王族を擁立しようと望んだのです。陳循・蕭鑑・商輅・江淵・俞士悅・王偉・古鏞・丁澄・項文曜はみな叛乱の陰謀を知りながら告發しませんでした。于謙たちは、重罪の「謀反」の罪にあたるので凌遲處死とし、陳循などは、事情を知りながらわざと見逃していたので斬決にしたいと思います」と。奏本がすでに提出されて、二日後にようやくこの命令が下された、という。

「實錄」によれば、景泰帝が病気で起き上がれなくなったために、英宗が皇帝に復位し、景泰帝の権臣たちが逮捕される。逮捕された権臣たちは、皇位繼承問題が自分たちの思い通りにならないことから反乱を計画したということが分かり、それが十罪のひとつの「謀反」にあたるとして、于謙たちは処刑された。ただ、奏本が提出されて、二日後にようやくこの命令が下さ

れた、とする。

三年をかけて編纂作業を行ない、成化三年（1467）八月十六日に完成した「英宗皇帝實錄」では、奪門の変直後の状況を以上のように記録する。これが、英宗を継いだ憲宗成化帝の時期の公式見解であろう。

この時、吏部右侍郎であった李賢は、「天順の時事に於いて頗る詳し」（『四庫全書總目提要』卷五十三・史部九・雜史類存目二・「天順日録一卷」条）といわれる『天順日録』で、奪門の変前後の様子やこの時の皇位継承問題について李賢の立場からつぎのように伝えている。

初め景泰（景泰帝）不豫たり。富貴を圖る者は回（因）りて異謀（反逆の謀）^{はかりごと}を起さんとす。學士（東閣大學士）の王文と太監の王誠 謀りて襄王の子を取りて立てて東宮と爲さんと欲す。其の事 漸く泄る。既にして景泰（景泰帝）の病 亟まりて、太監の興安 羣臣に諷して、東宮（後の憲宗成化帝）を復立せんことを請う。僉「上皇（英宗）の子 固より宜しく之を復すべし」と謂う。唯だ〔王〕文の意 此に在らず。閣下（華蓋殿大學士）の陳循の輩 亦た之を知る。〔李〕賢 會議に因りて學士（翰林學士）の蕭鎡に問うに、乃ち曰く、「既に退けば、再びする可からず」と。〔李〕賢 始めて其の異謀有るを覺ゆるなり。〔王〕文 又た衆に對して曰く、「今は只だ東宮を立つを請わん。安くんぞ知らん朝廷の意は誰に在るかを」と。〔李〕賢 益ます亦た其の必ず然るを知る。明日、早に奏詞を觀るに、「早に元良（皇太子）の人を選べ」と曰う。皆な曰く、「此れ復立の意に非ず」と。遂に其の説を石亨の輩に駕（詐称する）して曰く「王文・于謙 已に人を遣りて金牌勅符を齎らせ襄王の世子を取りて去くなり」と。即ち十七日早に于いて帶兵入朝し南城に詣り上皇の復位を請う。是の時、景泰 朝せざることに四日なり。先んずること一二日、其の説を石亨輩に駕（詐称する）すること有りて云う、「景泰（景泰帝）太監の張永等に命じて數人の掌兵する者を拿（逮捕）することを行なわしむ」と。其の上皇（英宗）を立てんことを謀る中官の〔曹〕吉祥・蔣冕の輩 太后に敕旨を寫くことを白し、〔石〕亨の輩に與え、此の事を成さしむ。遂に王文の輩を以て大逆奸惡を爲すとす。然れども王文の初謀は、于謙の輩は未だ必ずしも知らず。〔石〕亨の輩は于謙に回（因）りて軍務を總督するに過ぎず。一切の兵政（軍事・軍務）は、〔于謙が〕専らにして之を行なう。〔そのため、石〕亨其の私する所を遂げず、乃ち此の機に乗じて之を圖る。其の餘は平日の足らざる所の者に因りて之を中傷す。〔これらの人たちは〕未だ必ずしも皆な王文の初謀を知らざるなり。況んや王文の謀は、其の實 未だ發せず。所以に誅戮さる者は其の罪に非ざること多し。〔それなのに、石亨たちは〕、乃ち曰く、「臣等 命を捨てて此の大事を舉げ、以て社稷の功を爲す」と。上（英宗）益ます之を信じ、其の報典^{さかん}の隆なるを極む……（嘉靖十二年（一五三三）刻・明良集本（『續修四庫全書』史部四百三十三冊所収）『天順日録』不分卷・八十五葉～八十六葉）。

景泰（景泰帝）が病氣となられた。富貴を願うものは、それにかこつけて反逆の謀^{はかりごと}を起こそう

とした。東閣大學士の王文と宦官の王誠は、襄王の子を取り立てて皇太子にしよう考えた¹⁾。その謀議は、徐々に漏れ出した。そうこうして景泰（景泰帝）の病気が重篤となったので、宦官の興安は群臣にもとの皇太子であった英宗の太子（後の憲宗成化帝）を復位させるようにほめかした。群臣たちもみな、「上皇（英宗）の皇子はもとより復位させるべきだ」といった。ただし、王文の意向はそこにはなかった。華蓋殿大學士の陳循などは、それを理解していた。私（李賢）は会議のついでに翰林學士の蕭鎡にたずねると、蕭鎡は「すでに皇太子の地位から降りているのだから、再びなってもらふべきでない」という。私（李賢）は、はじめて反逆の^{はかりごと}謀があることを悟った。王文は、さらに皆に「どうして朝廷の意向が誰にあるかを知っているだろうか」という。私（李賢）はますます^{はかりごと}謀があることを理解した。翌日、早くに上奏の内容を見たところ、「はやく皇太子を選べ」とあった。皆は、「これは上皇（英宗）の皇子を復位させる意味ではない」という。とうとうでたらめを石亨の輩に告げて、「王文・于謙などは、金牌勅符を発行して、襄王の世子を〔皇太子として〕連れてこようとしている」といった。そして、十七日早朝に、兵士を率いて朝廷に入り、〔上皇（英宗）が幽閉されている〕南城に到って、上皇（英宗）の復位を求めた。この時、景泰（景泰帝）は政務を執れない状態が四日間続いていた。その一二日前に、「景泰（景泰帝）は、太監の張永などに命じて數人の兵権を握っている者を拿（逮捕）することを命じた」というでたらめを石亨の輩に告げることがあった。上皇（英宗）の復位を画策していた宦官の曹吉祥・蔣冕などは、太后に勅旨を書いてもらうことを申し上げ、その勅旨を石亨などに渡し、この復位を成功させた。そしてとうとう王文などを大逆奸惡であるとした。ただし、王文のもともとの^{はかりごと}謀については、于謙などが必ずしも知っていたものではなかった。石亨などは、于謙の命令で軍務を監督していたに過ぎなかった。すべ

1) 『明史』（卷一百十九・列傳第七・諸王四・仁宗諸子）によると、襄憲王瞻埜は、仁宗洪熙帝の第五子になる。母は昭皇后で、永樂四年（1406）三月十六日に生まれ、成化十四年（1478）正月十六日に七十三歳で亡くなる。英宗・景泰帝からすると叔父にあたる。

襄憲王以後の襄王府の系譜は、つぎのようになる。

嫡長子定王祁鏞	？～弘治元年（1488）薨	壽六十
庶長子簡王見淑	？～弘治三年（1490）薨	壽四十
庶長子懷王祐材	？～弘治十七年（1504）薨	壽三十一／子なし

また、黃瑜の『雙槐歲鈔』に、つぎのようについて。

襄邸朝禮

諸王 谷府（谷王榑）の變より後、鮮朝（入朝することが少ない）なること久し。天順の初め〔の土木の変の直後〕、晉王 朝するを請うに、詔して之を止む^②。是れより先、土木の変に襄憲王瞻埜 兩疏もて聖烈慈壽皇太后を慰安し、皇太子（後の憲宗成化帝）に天位に居攝し、急ぎ府庫を發し敢勇の士を募し、務めて迎復を圖るを命ずるを請う。仍お邸王に心を盡して輔政するを訓諭するを乞う。章 上つるの時、景泰 立ちて已に八日なり^③。是に至り諸（襄憲王の提出した二通の上奏文）を宮中に得、睿皇（英宗）之を覽て感歎し、勅もて入朝（天子に拝謁する）するを取（召喚）す。王（襄憲王）遂に戴星（すぐに）出立する）せんとして駕す……襄邸（襄憲王）の來朝するに及び、上（英宗）禮待すること甚だ隆んなり。庚辰（天順四年：1460年）に再び朝するや、錫寶（ほうびを取らせる）愈々厚し。迎立の謀は、其の實 未だ發せざること、益ます知る可し……（嘉靖三十八年（一五五九）陸延枝刻本（『四庫全書存

目』子部二百三十九冊所収)『雙槐歲鈔』卷第八・「襄邸朝禮」条・二十三葉)。

①谷王穗：『明史』(卷一百十八・列傳第六・諸王三・太祖諸子三・「谷王穗」)によると太祖洪武帝の十九子。靖難の変の時、守備していた南京の金川門を開いて永樂帝をむかえる。永樂帝は、恩義に感じ、厚遇する。しかし、領国で放埒な行為をくりかえしたため、宮中に召喚され、死罪は免れたものの廃されて庶人とされる。

②「實錄」に「[正統十四年九月丁未(三十日)]……晉王鍾鉉 來りて朝賀せんと欲するも、亦た復書(返書)して之を止む」(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十三・廢帝郕王附錄第一・「正統十四年九月丁未(三十日)」条)。

③正統十四年九月六日に郕王は皇帝となる。

諸王は、谷府(谷王穗)の変が起こつてからは、入朝することが少ない状態が久しく続いていた。天順(正確には正統十四年九月三十日)の初め[の土木の変の直後]に晉王(鍾鉉)が入朝を願い出たものの、詔を出して中止させた。土木の変の時に、襄憲王瞻埜は、二度の疏文で聖烈慈壽皇太后を慰安して、皇太子(後の憲宗成化帝)に即位してもらい、急いで宮中の金庫を開いて勇敢な士を募集し、つとめて英宗の帰還をはかるよう命ぜられることを願い出た。それに加えて、郕王に心を尽くして政務を輔佐するように訓示されるように願い出た。上奏文が提出された時には、景泰が即位して八日たっていた。英宗が復辟して、襄憲王の提出した二通の上奏文が宮中で見つかった、睿皇(英宗)はこれを読んで感歎し、詔を発して入朝をさせた。そこで、襄憲王は、急いで出発した。襄邸(襄憲王)が入朝すると、上(英宗)はきわめて厚くもてなした。庚辰(天順四年：1460年)にふたたび來朝した時には、ますます厚くほうびを取らせた。後に、襄憲王の子の祁鏞が王位を継ぎ、終始仲睦まじく、変化がなかった。そうであれば、景泰帝の末年に襄憲王の子の祁鏞を帝位に即けるというくらみは、実際に行われなかったことは、ますますはっきりするであろう、という。

こうした史料を総合して清代に編纂された『横雲山人明史列傳彙』では、襄憲王をつぎのようにのべる。

襄王瞻埜

襄憲王瞻埜、仁宗の第五子なり。永樂二十二年(1424)に封ぜらる。莊敬(莊嚴でうやうやしい)にして令譽(すぐれた名声)有り。宣德四年(1429)、長沙に就藩す。正統元年(1436)、襄陽に徙る。英宗北狩し、諸王中、瞻埜 最も長にして且つ賢なり。衆望 頗る屬す。太后 襄國の金符を取りて入宮を命ずるも、召すを果たさず。瞻埜 上書して皇長子を立て、郕王をして監國とし、勇智の士を募し車駕を迎えんことを請う。書 至るも、景帝(景泰帝)立ちて數日なり。英宗 京師に還り、南内に居る。又た上書し、景帝(景泰帝)宜しく旦夕に省膳(食事に気を配り)問安(ご機嫌をうかがう)し、羣臣を率いて朔望に見え、恭順なるを忘れること無かるべし、と。英宗 復辟し、石亨等は于謙・王文の外藩を迎え立つと誣するの語有り。帝(英宗)頗る[襄憲王]瞻埜を疑う。久之、宮中より[襄憲王]瞻埜の上つる所の書を得、而して襄國の金符[于謙・王文のところではなく]固より太后の閣中に在り。乃ち書を賜いて[襄憲王]瞻埜を召し、二書を[『書經』の]金縢に比す……歳時に存問す。禮遇の隆は諸藩の未だ有らざる所なり(康熙五十三年『横雲山人明史列傳彙』列傳第五・諸王三・「襄王瞻埜」・十葉：『明史』卷一百十九・列傳第七・諸王四・仁宗諸子・「襄王瞻埜」も同文)。

①周公は、病気になった武王の身代わりになろうと、天にいる周の三人の王に願った時に書かれた請願書。『書經』に収められ、篇名ともなっている。

襄憲王瞻埜は、仁宗洪熙帝の第五子である。永樂二十二年(1424)に襄王に封ぜられる。莊嚴でうやうやしく、すぐれた名声を得ていた。宣德四年(1429)に長沙に王府を開いた。正統元年(1436)に襄陽に転封になった。英宗が土木の変で北方に拉致されると、諸王のなかで、襄憲王が最年長であり、また賢者であったので、人々の希望が集まった。太后は、襄王を召し出すのに必要な襄王の印を取り出して宮中に来るように命じたが、来られなかった。襄憲王は、意見書を提出して、皇長子(後の憲宗成化帝)を即位させ、郕王(景泰帝)を監國とし、勇敢で智慧のある者を募って、英宗を迎えるよう述べた。書簡は到着したものの、景泰帝が即位した数日の後であった。英宗が帰還して、南内に居住するようになると、また意見書を提出して、景泰帝は朝晩について食事に気を配ってご機嫌をうかがうし、朔日と十五日には群臣とともに面会し、恭しく順うことを忘れるべきではないと述べた。英宗が復辟し、それに功績があった石亨たちは、于謙・王文が外藩を迎えて即位させようとしたと誣告した。そのため、英宗はたいそう襄憲王を疑った。しばらくして宮中で襄憲王の意見書が見つかり、襄王を召し出すのに必要な襄王の印も、[于謙・王文のところではなく]

ずっと太后のところにあったことが分かった。そこで、書簡で襄王を召し出し、襄王の意見書を、周公の「金縢」に匹敵するとした。英宗は、年ごとに慰勞した。そのもてなしの盛んなことは、他の王府の及ばないところであった、という。

なお、『弇山堂別集』所引の『傳信辨誤錄』につぎのように言う。

『傳信錄』に言う、景帝（景泰帝）未だ崩ぜざるの時、楚の世子を駕取して入りて繼がしむる〔謀が〕有り。〔楚の〕世子 行かんと欲するに、長史の伍姓なる者 之を止めて曰く、「事 此の如しと雖も、宜しく金牌敕書の來るを待ち、然る後に行くも未だ晩からざるべし」と。後、英廟（英宗）復た世子を召し、其の來らざるの故を問うに、世子 具さに之を言う。英廟（英宗）悦び、長史を召し、賜うに襲衣金帶を以てす。長史の金帶は此れより始まる。伍は蓋し蘇州の人なり。其の名は忘る。〔しかし〕吾が蘇州に長史の伍姓なる者無し（『弇山堂別集』卷二十四・史乗考誤五）。

①『傳信錄』は、明・陳虞岳の『傳信辨誤錄』のことだと思われる。ただ、今のところこの書物を見ることはできなかった。そこで、『弇山堂別集』所引の『傳信辨誤錄』による。

明・陳虞岳（泰和の人。陳循の五世の孫）の『傳信錄』に、つぎのようにいう。景帝（景泰帝）がまだ崩御される前、楚の世子を召し出して即位させようという謀があった。そこで、楚王府の世子は行こうと考えた。しかし、長史の伍某がそれを制止して、「事情はそのとおりだとしても、金牌敕書が到着するのを待って、出発しても遅くはないはずです」と申し上げた。後に英宗はまた招いて、その出てこなかったわけをたずねた。楚王府の世子は、すっかり事情を述べた。英宗は喜んで、その長史を召し出し、襲衣金帶を下賜した。長史が金帶を賜るという故事は、ここから始まった。長史の伍某はおそらく蘇州の人であろう。しかし、蘇州には長史をやっていた伍某なる者はいない、という。

王世貞は、この『傳信辨誤錄』を引用して、つぎのようなコメントを附している。

按ずるに、景帝（景泰帝）羣臣の元良（皇太子）を擇ぶを請うを以て尚お且に聴かず。豈に速くの疏屬（傍系の親屬）を取り入れて大統（帝位）を繼ぐの理有らんや。之を正史に考えるに、復辟の後、楚の世子 原より未だ入朝せず。而して長史の金帶は原より英廟（英宗）より始まらず。齊東野人の語 誠なるかな無稽なり（『弇山堂別集』卷二十四・史乗考誤五）。

景帝（景泰帝）が臣下の皇太子を取り決めてほしいという請願を聞き入れようとはしなかった。なのにどうして傍系の親族を招きだして帝位を継がせる理由があるのだろうか。このことを史実に照らし合わせて考えてみると、英宗が復辟してから、楚王府の世子は都にやってきたことがない、また長史が金帶を賜るという故事は、英宗の時から始まっていない。取るに足りない話であり、ほんとうに根拠のないものである、という。

王世貞のコメントに少しばかり付け加えると、襄王瞻埜は始め宣德四年（1429年）長沙に王府を開いたことから、楚王と無理やりに関連付けることはできるかもしれない。ただ、太祖の第六子の朱楨が洪武三年（1370）に「楚王」に封ぜられているので、ここは楚昭王楨の王府を指すと考えられる。しかし、この時には、楚王府には世子がいなかったようである。

『弇山堂別集』（卷三十二・同姓諸王表・「楚昭王楨」条）・『明史』（卷一百十六・列傳第四・諸王一・太祖諸子一）によると、太祖第六子の朱楨以後の楚王府の系譜は、つぎのようになっている。

楚昭王楨（元・至正二十四年（1364）三月三日～永樂二十二年（1424）二月二十二日／壽六十一）

嫡三子の莊王孟烷（？～正統四年（1439）／壽五十八）

庶長子の憲王季垺（武陵王から：？～正統八年（1443）／壽三十一）子供無し

庶二弟の康王季垺（黔陽王から：？～天順六年（1462）／壽四十）子供無し

莊王庶三子の東安王季堧の庶長子の靖王均銳（成化元年（1465）に嗣ぐ：？～正德五年（1510）／壽六十一）

嫡長子の端王榮滅（？～嘉靖十三年（1534）／壽五十八）

庶長子の愍王顯榕（嘉靖十五年（1536）に嗣ぐ：？～嘉靖二十四年（1545）／壽四十）

庶三子の恭王英燦（嘉靖三十年（1551）に嗣ぐ：？～隆慶五年（1571）／壽三十一）

子の華奎は、幼なかったため萬曆八年（1580）に嗣ぐ。崇禎十六年（1643）、張獻忠の反乱軍のために亡くなる。

景泰年間から天順六年にかけては、子供がいなかった康王季垺の代にあたる。

ての軍務は、于謙が専ら取り仕切っていた。石亨は自分の思いのままにならなかったで、この機会に乗じて、于謙の追い落としを謀った。それ以外は、もともと不平を抱いている者たちを利用して中傷させた。こうした人たちは、すべてが王文のもともとの謀^{はかりごと}を知っていたわけではなかった。まして、王文の謀^{はかりごと}は実際のところ行われなかった。したがって、誅戮された者たちは、その罪にあたらないことが多かった。それなのに、石亨たちは、「臣たちは、命を捨ててこの大事を挙行し、国家のための功績を行ないました」といい、上（英宗）はますますお信じになって、恩賞を厚くした、という。

襄王の子を取り立てて皇太子とするという謀議は、実際に存在し、東閣大學士の王文と宦官の王誠とによって計画されていた。ただし、于謙はこの謀議をかならずしも知っていたわけではない、と李賢は伝えるのである。

王世貞は、『弇山堂別集』において『天順日録』のこの個所を引用し、王文が皇位継承問題にかかわり、于謙はそれに関係がなかったとすることについて、次のような意見を述べる。

此の語 實録と謂う可し。醜正（正直者を憎む）の徒 必ず襄〔王の子〕を迎え易儲せんとするを以て證（証拠）を肅愍（于謙）に釀（なすりつける）するに至る。而して史 乃ち王毅愍（王文）の謀を併せて之を掩う。後、遂に肅愍（于謙）と同じく贈諡さるを得。而して肅愍（于謙）は今に至るも尚お功首（第一の功績）・罪魁（首魁）の説有り。抑そも何をか幸ならん、不幸ならん（『弇山堂別集』卷二十四・史乗考誤五）。

この記録は實録であるといえる。正直者を嫉妬するやからは、襄王の子を迎えて皇太子とする謀^{はかりごと}の証拠を于謙になすりつけるようにすることになった。ただ、史書の記録では〔于謙の名誉回復によって〕王文の謀^{はかりごと}を覆い隠してしまった。そして、後には「肅愍」と諡された于謙と同じように「毅愍」と諡される名誉を得た。しかし、于謙は今に至るまで、功績と批判が入り混じっている、という。

それに対して、清・夏燮（字は嘆父。安徽當塗の人。嘉靖五年〔一八〇〇〕～光緒元年〔一八七五〕）は、『明通鑑』（清・同治十二年（一八七三）宜黄刊本）の「攷異」で、つぎのように批判する。

〔攷異〕弇州（王世貞）の「攷誤」は、『天順日録』の語を誤り信じ、以て「襄王を迎え立つは、〔王〕文 實に是の謀有り。^{しか}而して史 于謙を追雪するに因りて、遂に王毅愍〔王〕文の諡なり の謀^{あわ}を竝（『弇山堂別集』卷二十四・史乗考誤五は「併」に作る）せて之を掩い、遂に肅愍 〔于〕謙 初めは「肅愍」と諡され、後に「忠肅」に改めらる と同じく贈諡さるを得」と爲す。〔しかしながら〕襄王を迎え立つことは、直ちに是れ「莫須有^①（あったかもしれないが、必ずあったとはかぎらない）」なるを知らず。〔清朝欽定の〕『明史』〔王〕文傳 極めて其の冤なるを稱す。^{しか}而して采る所の『天順日録』の語は極めて斟酌する有り。〔『明史』の〕傳中に「〔王〕文の死するは、人皆な其の誣なるを知る。〔ただ、王文は〕素より刻伎（刻薄で人を妬む）なり。且つ迎駕して復儲（皇太子を立てる）せんとするの議の輿論^{かな}に協

わざるを以て、故に冤死するも、民 思わず（人々は知らぬ顔であった）」云云と言う。此の論 平允なり。「良史」（『左傳』宣公二年）の筆と謂う可し。王弼州（王世貞）の「其の實 迎立の謀有りて、^{しか}而して反って其の易儲の預からざるを諱む（かくす）」と謂うが若きは、未だ是非の顛倒（さかさまにする）を免れず（『明通鑑』卷二十七・十五葉）。

①『宋史』岳飛傳に「獄之將上也、韓世忠不平、詣〔秦〕檜詰其實、〔秦〕檜曰、〔岳〕飛子〔岳〕雲與張憲書雖不明、其事體莫須有。〔韓〕世忠曰、莫須有三字、何以服天下（獄の將に上つらんとするや、韓世忠 平らかならず。〔秦〕檜に詣り其の實を詰（責め問う）す。〔秦〕檜 曰く、〔岳〕飛の子の〔岳〕雲の「與張憲書」は明らかならずと雖も、其の事體「莫須有（有るかもしれない）」と。〔韓〕世忠 曰く「莫須有」の三字、何を以て服天下を服せんや、と）」。

弼州（王世貞）の「攷誤」は、『天順日録』の記載を誤って信じてしまい、「襄王を迎えて帝位につけるとということについては、実際にこの謀議はあった。しかし、史書の記録では、于謙の名誉回復を行なうことによって、とうとう王文の謀もあわせて覆い隠してしまった。そして于謙と同じように諡をあたえられことになった」とした。しかしながら、襄王を迎えるということは、「莫須有（あったかもしれないが、必ずあったとはかぎらない）」ということを理解していない。清朝欽定の『明史』王文列傳は、王文が冤罪であることを口をきわめて主張した。しかも、王世貞の「攷誤」の記述と異なり、利用した『天順日録』の記載はきわめて慎重に取り扱った。『明史』王文列傳で「王文は冤罪で処刑されたと人々は分かっていた。だが、王文は刻薄で人を嫉妬する性格であった。その上、他から皇位継承者を招き皇太子とするという提案が世論に受け入れられるものではなかったことから、冤罪で亡くなったものの、人々は知らぬ顔であった」云々と述べている。この理解は、公平で妥当である。すぐれた歴史家の記述だと言うべきである。王世貞が「実際に皇位継承者を招くという謀はあった。しかしその謀に係わらなかったことを隠した」というのは、是非をさかさまにする（正しいことを間違えたり、間違ったことを正しいとする）ことを免れない、という。

なお、黃瑜（字は廷美、号は友琴、晩年に雙槐老人と号した。廣東香山の人。宣德元年（一四二六）正月六日～弘治十年（一四九七）三月二十二日。景泰七年（一四五六）の舉人。惠州府長樂縣知縣：成化五（？）年～成化八年（一四七二）在任）の『雙槐歲鈔』も、『天順日録』を参考にしたのかどうか断定できないが、ほぼ同じようなことを伝える。

……初め景泰（景泰帝）不豫たり。群臣 睿皇（英宗）を復せんことを願う。惟だ内閣〔大學士〕の王文と太監の王誠は、襄世子（襄王瞻墿の子の祁鏞）を立てんと欲す。陳循の輩 之を知る。已にして景泰（景泰帝）の疾 ^{きわま} 亟れり。太監の興安 羣臣 ^{ほのめか} に諷して、茂陵（憲宗成化帝）を東宮に復せんことを請わす。僉 ^{みな} 以て宜しと爲す。王文 獨り曰く、「之を請うと雖も、其れ誰をか立てんと欲するや」と。學士の蕭鑑 曰く、「既に退けば、再びする可からず」と。故に奏辭に「元良（皇太子）を擇ぶを請う」を以て言と爲す。奏 ^{たてま} 上つらるるも、^{ゆる} 允されず。人 競いて王文・于謙 已に人を遣りて金牌勅符 ^{もた} を齎せ、襄府に

往かしむ、と傳う。副都御史の徐有貞及び武清侯の石亨・都督の張軫・張輓と鴻臚卿の楊善等 共に「英宗の」復辟を謀る。太監の曹吉祥・蔣冕の輩 皇太后に敕せよと白す。〔景泰八年／天順元年〕正月壬午（十七日）黎明、〔石〕亨・〔張〕軫 甲士（武装した兵士）を以て南城に入り、門を毀ち、睿皇（英宗）を迎え、復位さす。王文・于謙 皆な大逆を以て棄市さる。始め〔徐〕有貞 猶豫す。張軫・楊善 曰く、「〔于〕謙等を殺さざれば、今日 何れの名あらん」と。遂に決す。或いは謂う、「〔王〕文と王誠と初めの謀は、〔于〕謙 未だ必ずしも知らず。金牌勅符は太后の閣中に在り²⁾、未だ嘗て出でざるなり」と。然れども睿皇（英宗）の虜に陥りし時、也先^{やせん}駕を復するを以て名と爲し、京師に徑逼するに、〔于〕謙 人をして之に謂いて曰く、「中國に君有り。駕 其れ復すること母れ」と。大同に至り、定襄伯の郭登の言うこと亦た之の如し。矧や〔于〕謙 軍務を總督するの時、事を行なうに自專^①（思い通りにしたがる）にし、〔石〕亨等の惡む所と爲る。駕の復するに

- 2) 金牌勅符については、陸容（先世までは「徐」姓、陸容の時に「陸」姓に復す。字は文量、号は式齊。江蘇崑山の人。正統元年〔一四三六〕～弘治七年〔一四九四〕。成化二年丙戌科（一四六六）二甲二十九名の進士）の『菽園雜記』に、つぎのように伝える。

于公謙、王公文 害に遇う（処刑される）の時、〔罪状として〕外藩を迎立するを以て之を誣（誣告）さる。〔王〕文「冤なり」と稱す、〔于〕謙 但だ云う「親王は金符有るに非ざれば召す可からず。當に之を辯ずべし」と。時に印綬・尚寶の諸内官 之を聞き、各王府の符を検閲するに、具さに在り。獨り襄王府の者無し。衆 皆な危疑するも、其の故を知らず。乃ち一（ひとり）の退任する老内官に問う。〔すると、その老内官は〕云う「嘗て記〔憶〕するに宣徳の間に老娘娘の旨有りて取り去れり、但だ何れに在るかを知らず。老宮人某 尚お在り、必ず其の詳〔細〕を知る」と。遂に往きて之を問う。〔するとその老宮人は〕云う「是れ宣廟（宣宗宣徳帝）の賓天する時、老娘娘 以為らく國に長君有るは、社稷の福なり、と。嘗て襄王を召さんと欲し、因りて取り入る。後に三楊學士（楊士奇・楊榮・楊溥）の議の諧^{かな}わざるを以て止む。符 今は後宮の暖閣の中に在り。老娘娘は、張太后なり」と。是に於いて太后に啓して之を求め、果して其の處に得、已に塵を積みて埋沒すること寸餘なり。其の後、英宗 二人の冤なるを悟りて悔ゆる者なり。亦た此れを以て云う（『菽園雜記』卷八）。

①この張太后は、仁宗洪熙帝の皇后張氏を指すものと思われる。宣徳十年に英宗が即位すると、太皇太后となり、正統七年十月十八日に崩ずる。

②英宗復辟後の時期に太后だったのは、宣宗宣徳帝の皇后で英宗の生母の孫氏であるので、この太后は、孫氏を指すものと思われる。宣徳十年に英宗が即位すると、皇太后となり、天順六年九月四日に崩ずる。

于謙と王文とが処刑される時、罪状として外藩を迎えて擁立しようとしたと誣告された。王文は「冤罪」だと陳述した。于謙は、「親王は金符を用いないと都に召し出すことができない。それをはっきりさせるべきだ」という。この時、印綬〔監〕や尚寶〔司〕の宦官たちは、これを聞いて、それぞれの王府の印綬を検閲してみると、すべてあった。ただ襄王府の印綬だけなかった。皆は危ぶみ疑ったけれども、その理由がわからなかった。そこで引退した老宦官に尋ねてみると、「宣徳年間に老娘娘（太后）のご命令で持ち出したと記憶している。ただ、どこにあるかは分からない。老宮人の某がまだいるので、その詳細を知っている」という。そこで、その老宮人某に尋ねてみると、「宣廟（宣宗宣徳帝）の賓天された時、老娘娘（太后）が國家に長君がいるのは、國家の喜びであるとお考えになった。そして襄王を召し出そうとして、襄王の印綬を取り寄せた。しかし閣臣の三楊學士（楊士奇・楊榮・楊溥）の意見と合わなかったの、取りやめになった。印綬は後宮の暖閣にある。この老娘娘（太后）は、張太后（仁宗洪熙帝の皇后）である」と答えた。そこで、太后（宣宗宣徳帝の皇后で英宗の生母の孫氏）に申し上げ、探したところ、果たして後宮の暖閣にあり、一寸余りのほこりが積もっていた。その後、英宗は于謙と王文が冤罪であったことを知り、悔やんだ、という。

及び、上（英宗）羣臣に誥して「師を喪^{うしな}い國を辱^{はずかし}め、宗廟を玷^{はずかし}むること有り」等の語有り、實に内閣の代言（天子に代わって詔命を草擬する）に出づ。故に〔于〕謙・〔王〕文 懷疑（心に疑いを抱く）して決せず、以て此に至る。然れども郭登 上（英宗）の怒りを犯すと雖も、惟だ爵を削られ甘肅に安置さるのみ。〔于〕謙等をして早に大計を決せしむれば、亦た未だ必ずしも誅されざるなり……（嘉靖三十八年（一五五九）陸延枝刻本（『四庫全書存目』子部二百三十九冊所収）『雙槐歲鈔』卷第八・「襄邸朝禮」条・二十三葉～二十五葉）。

①『中庸』第二十八章第一節に「愚而好自用，賤而好自專，生乎今之世，反古之路，如此者，裁及其身者也（愚にして自から用いることを好み，賤にして而好自から専らにすることを好み，今の世に生まれて，古の路に反らんとする，此の如き者は，裁^{わざわい} 其の身に及ぶ者なり）」。

景泰（景泰帝）が病氣となられた。臣下の者たちは、睿皇（英宗）に復歸してもらいたいと願った。ただ、内閣大學士の王文と宦官の王誠とは、襄王瞻墻の子の朱祁鏞を皇帝に擁立したいと思っていた。陳循などは、そのことを分かっていた。しばらくして、景泰（景泰帝）の病状がひどくなった。宦官の興安は、臣下の者たちに遠まわしに茂陵（もとの皇太子。英宗の子、後の憲宗成化帝）を皇太子の地位に戻すことを願い出るようにさせた。ところが、王文ひとりが、「皇太子をふたたび立てるとしても、どなたを擁立するのか」という。學士の蕭鏊は、「いちど退位された方は、戻っていただくべきではない」という。そのため、上奏文には、「元良（皇太子）をお選びいただくよう願います」という文面となった。上奏文が提出されたものの、お認めいただけなかった。人々は争って、王文・于謙が、都に来てもらうために必要な金牌勅符を人に持たせて襄王府に派遣したと伝え合った。副都御史の徐有貞・武清侯の石亨・都督の張軏・張軏と鴻臚卿の楊善などは、皆で英宗の復辟を謀った。宦官の曹吉祥・蔣冕などが、皇太后に申し出て敕書を用意した。正月壬午（十七日）明け方、石亨・張軏は、武装した兵士を率いて、英宗が軟禁されている南城に突入し門を壊して、睿皇（英宗）をお迎えして帝位に復歸してもらった。そして、王文・于謙は、十惡のひとつの「謀大逆」の罪状で棄市された。もともと、徐有貞は、王文・于謙への処分を躊躇した。張軏・楊善が、「于謙たちを殺さなければ、いまどんな名声が得られるのか」という。そうしてやっと処分が決まった。別の伝聞では、「王文と王誠の謀については、于謙は必ずしも知っていたということはない。持ち出したといわれる金牌勅符は、太后のお手元にあり、これまで持ち出されたことはない」という。しかしながら、睿皇（英宗）が虜に囚われ、虜の也先^{やせん}が睿皇（英宗）を送り届けることを名目に北京に逼ってきた時、于謙は「中国にはすでに皇帝（この時に即位した景泰帝）がいらっしゃる。英宗は送り届けることはしない」と伝えさせた。英宗が大同に到着すると、定襄伯の郭登も同様の発言をおこなった。まして、于謙が軍を総督すると、思い通りにしたが、于謙のもとで働いていた武官の石亨などの恨みを買った。英宗がお帰りにになると、上（英宗）は「軍隊を失い国家に恥辱をあたえてしまい、宗廟に汚点をつけた」などの発言をされた。これは、内閣から出された政府の公式見解だから于謙・王文は決心がつかなかったのである。だが、定襄伯の郭登は上

(英宗)に怒りを買ったといっても、爵位を剥奪され甘肅に追放になっただけである。于謙たちは、はやくに帝位継承についての決定を行なっていれば、必ずしも誅されることはなかったであろう、という。

于謙の長子の于冕(字は景瞻、号は南湖歸叟。浙江錢塘の人。永樂二十年(一四二二)～弘治十三年十二月)の「先肅愍公行狀」には、于謙の立場からの記述であるが、于謙たちの処刑と大きくかわった皇位継承問題を中心につぎのようにいう。

……明年(景泰八年／天順元年)正月、景泰帝 不豫たり。在廷の文武の群臣と公(于謙)等 上章して、憲廟(英宗の皇子。後の憲宗成化帝)の臨朝を請う。議 未だ下らず。太上皇帝(英宗)寶位に光復し、「天順」に改元す。實に天と人と[の願いが]之に歸するなり。會たま石亨等「天の功を貪りて掩いて己が有と爲し^①」、奪門迎復の名に假りて以て朝廷を欺き、誣^{そし}りて外藩を迎立せんとするの罪以て私怨に報ず。其の奸計を原ぬるに、蓋し謂う、此の罪 重からざれば則ち彼の功高からず、大いに[景泰帝の]股肱の重臣を殺さざれば則ち威立たず、黨逆(悪人たちがかばい合う)の大獄(重大な案件)を構成(捏造する)せざれば則ち權専らならずと謂う。機に乗じて言官^{そそのか}を嗾し、公(于謙)と王文等の六七の大臣を[彈]劾し、俱に獄に下す。所司[外藩を北京に招くのに必要な]金牌敕符の禁中に見存し、別に顯迹無きを勘得(調査)す。[石]亨等 揚言(声高に主張)して實迹無しと雖も、其の意は則ち有りとす。廷鞫の日、徐有貞 衆に對して大聲もて所司をして痛く拷掠(鞭打して審問する)を加えしむ。[王]文 其の忿に勝えず、反覆して力辯す。公(于謙) 徐むろに曰く、之を辯ずるも何の益あらん、と。所司[石]亨等を畏懼し、羅織(罪のないものを罪に陥れる)鍛煉(罪をでっちあげる)し、「意欲」二字を添捏して、文致(罪に陥れる)して成招(供述書にサインする)さす。蓋し秦檜の云う所の「莫須有(あったかもしれないが、必ずあったとはかぎらない)」の故智を踵ぐなり。忠良の誣らるること、古今 一途に出るが如し。痛ましきかな。是の月二十三日、狀聞し、上(英宗)猶予すること良久しくして、「于謙 曾て功有り」と曰う。衆 相い顧みて未だ對えるに及ばず。徐理 避けて南遷を倡えるの故に、「有貞」と改名す。素より前事を以て公(于謙)を憾む。直ちに前^{すす}みて對^{こた}えて曰く、「若し[于]謙等を死に置かざれば、今日の事 名無しと爲す」と。上(英宗)の意 乃ち決し、公(于謙)と[王]文と遂に遇害さる……(『于忠肅集』附「先肅愍公行狀」)。

①『左傳』僖公二十四年に「竊人之財、猶謂之盜、況貪天之功以爲己力乎(人の財を竊^{ぬす}むも、猶お之を盜と謂う、況んや天の功を貪りて己の力と爲すをや)」。

明年(景泰八年／天順元年)正月、景泰帝は病気になられた。朝廷の文武の官員と公(于謙)たちは、意見書を提出して憲廟(英宗の皇子。後の憲宗成化帝)が朝廷に出御することを願い出た。景泰帝の議(返答)が出されないうちに、太上皇帝(英宗)が帝位に復歸され、年号を「天順」に改められた。これは實に天と人との願いがかなえられたのである。たまたまその時、

石亨たちが、天の功績を貪って自分のものとし、英宗を取戻し復辟した名にかりて、朝廷を欺き、外藩を招こうとしたと于謙たちを誣告して私怨をはらそうとした。その奸計（よこしまな計略）を探ってゆくと、おそらく罪状が重くなければ功績が高くない、景泰帝の股肱の重臣をおおく殺さなければ威厳が成り立たない、悪人たちがかばい合っているという案件を捏造しなければ権力を専らにできないというのであろう。そうして、その機会に乗じて、言官（都察院御史・六科給事中）をそそのかして、公（于謙）と王文など六・七名の大臣を告発し、みなを獄に下した。所司（役人）は、外藩を北京に招くのに必要な金牌敕符が宮中に置いてあり、別に使用した痕跡がないことを調査済みであった。なのに、石亨たちは実際の証拠がなくても、その計画はあった、と声高に主張した。朝廷での審理が行われた日、徐有貞は大声で所司（役人）にひどくむち打たせて尋問させた。王文は怒りに耐え切れず、何度もつとめて弁明した。公（于謙）はゆっくりと、「このことを弁明しても、いかほどの役に立つだろうか」という。所司（役人）は、石亨たちをたいへん畏れていたので、罪をでっちあげ、「意欲（しようという意志があった）」という二字を捏造して付け加え、罪に陥れて、自白書を書かせた。思うに秦檜が岳飛を罪に陥れた時に用いた「莫須有（あったかもしれないが、必ずあったとはかぎらない）」の策略に類するものである。忠良の者が誣告されるのは、古今同じようなやり方による。痛ましいことだ。この月の二十三日、事情が伝わり、上（英宗）は猶予されること久しくして、「于謙は前に功績がある」とおっしゃった。皆はお互いに見つめ合って申し上げることがなかった。すると、土木の変の時、北京を放棄して南に逃げるよう主張したため、「理」から「有貞」に名前を変更することになった徐有貞は、もとより改名の原因となった公（于謙）を怨んでいたもので、ただちに進み出て、「もしも于謙たちを死罪にしなければ、今回の復辟は名目が立たなくなってしまう」と申し出た。上（英宗）の気持ちもそこで決定し、公（于謙）と王文は処刑された、という。

于謙の立場からの記述であるが、皇位継承については、まったくの冤罪であると伝える。英宗を復辟させた石亨たちは、自分たちの功績をより高めるために、于謙・王文たちを処刑したというのである。

ただ、于謙たちを極刑に処するためには、「謀反」の罪に問わないといけない。そして、「謀反」とするためには、謀略を立てたとしなければならない。その謀議を、「實録」では、

群情 皇上（英宗）を迎えんと欲するを見て、乃ち不軌（叛亂）を為さんことを圖り、逆旅（叛逆の軍隊）を糾合、總兵等の官を擒殺し、外藩を迎立せんと欲す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實録』卷二百七十四・「天順元年正月丁亥（二十二日）」条）。とする。本来あるべき英宗の血筋への皇位継承を無理に変更しようとし、それを遂行するために武力を用いようとしたことであるという。つまり、皇位継承問題が、于謙たちの処刑と大きくかかわったといえる。

ところが、後に于謙たちの名誉回復が行なわれると、于謙たちが外藩の世子を迎えて擁立し

ようとしたことは、冤罪であったと認定される。公式記録である英宗「實録」の于謙と王文の小傳につぎのようにある。

……[石] 亨 上（英宗）を迎えて復位さす。[そして]、[于] 謙と王文とが外藩を立てんことを謀ると誣り、言官（都察院御史・六科給事中）を嗾し、之を[彈] 劾して廷に鞠（取り調べる）す。[王] 文 反覆（くりかえす）して力めて辯ず。[于] 謙 曰く、「[石] 亨の意 此の如し。之を辯ずるも何の益あらん」と。竟に誣伏（無実の罪に服す）して市に斬せらる。既に久しくして事 白（真相が明らかとなる）たり。上（英宗）亦た其の冤なるを知る……（大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實録』卷二百七十四・「天順元年正月丁亥（二十二日）」条）。

石亨は、上（英宗）を幽閉先からお迎えしてふたたび即位させた。そして、于謙と王文とが、外藩の世子を擁立しようと謀ったと誣告し、言官（都察院御史・六科給事中）たちをそそのかして糾弾して、朝廷内で取り調べさせた。王文は何度も弁明した。于謙は、「石亨の意向がそうなのだから、弁明しても何にもならない」と言う。とうとう無実の罪に服して市で処刑された。そうこうして、真相が明らかとなり、上（英宗）は、冤罪であったことを理解した、という。

……上（英宗）復た寶位に登る。石亨等 己の功を大にせんと欲し。言官を嗾し[王] 文と于謙等を[彈] 劾し、外藩を迎立するの邪謀有りとし、命じて廷に鞠（取り調べる）す。[王] 文 辯じて曰く、親王を召すは須らく金牌信符を用うべし。事の有無 此を稽えれば知る可し、と。詞直に氣壯なり。衆 敢て其の情を達（明白）せず。遂に誅に坐す。其の家を籍沒し、諸子 悉く邊衛に發戍す。久之、上（英宗）悟り、乃ち其の子を宥還す……（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實録』卷二百七十四・「天順元年正月丁亥（二十二日）」条）。

上（英宗）が帝位にお戻りになった。石亨たちは、自分たちの功績を大きく見せたいと願う。言官（都察院御史・六科給事中）たちをそそのかして弾劾させて、外藩の世子を擁立しようと謀ったとし、朝廷内で取り調べさせた。王文は弁明して、「親王を北京にお招きするには、金牌信符を用いなければならない。事のあるなしは、そのことを考えれば理解できるであろう」という。発言ははっきりして、氣迫がこもっていた。皆はそのことを明白にせず、とうとう処刑した。その家の家産を没収し、子供たちは辺境に流された。しばらくして、上（英宗）は、冤罪であったことを悟られて、その子供を赦し帰還させた、という。

李賢などによって、于謙については、最初から関係がなかったものの、王文は外藩の世子を擁立しようとする考えがあったとされてきた。ところが、この「實録」の小傳では、金牌信符の事を用いて王文が弁明したことを記載しているので（注2の『菽園雜記』では、于謙の発言とする）、公式記録では、謀議自体が存在しなかったと判断していると考えられる。こうして、皇位継承問題について議論はいちおうの決着がついた。

ところが、憲宗成化帝にしてみれば、帝位を継承できたものの、即位はかなり危ういもので

あったと理解していたのではないか³⁾。もともとは、自分を危うくした首謀者として于謙・王文が取沙汰されていた。しかし、成化年間に編纂された英宗「實錄」における見解や憲宗成化帝みずから于謙の「祭文」を論していることからすると、憲宗成化帝は、この時期の皇位継承問題について、于謙たちは冤罪であると考えていたと推測できる。すると、自分を窮地に陥れたいちばんの元凶としてやはり叔父の景泰帝が挙げられることになる。そのうえ、父親の英宗の景泰帝への不満表明のひとつとして、自分の名前さえ変更させられてしまった。ただ、皇帝となった憲宗成化帝としては、あくまでも寛容でなければならない。表面上は寛容を装っていても、心中のわだかまりはずっと続いた。その憤懣が、諡号を贈ったり、選定したりするときに噴出した、と考えられないだろうか。

なお、復辟直後の英宗が、景泰帝をどのように取り扱ったかについては、拙稿「明・景泰帝の諡号「戾」について」(『経済理論』384号)において、すこしばかりの検討をおこなった。ただ、そこで触れなかったが、憲宗「實錄」によると、憲宗成化帝は、天順元年に、「見深」から

- 3) 本稿で検討したように、憲宗成化帝は、いちど景泰帝によって皇太子の地位を追われている。さらに、憲宗成化帝の即位直前にもつぎのような話があったという。崔銑(字は後渠。河南安陽の人。成化十四年(一四七八)～嘉靖二十年(一五四一)。弘治十八年乙丑科(一五〇五)二甲一名の進士)の『洵詞記事抄』は、次のようにいう。

天順の末、讒する者「憲皇(憲宗成化帝)は、景泰に嘗て廢せらる。[だから]當に別に嗣を立つべし」と謂う。英皇 之を意疑(懷疑)す。獨り李賢のみ從わず。一日、上(英宗)便殿に病臥す。李賢を召して論して曰く、「今、庶事 頗る寧なり。顧だ大なる者(皇位継承)反って搖す。奈何せん」と。[李]賢 曰く、「此れ國本を謂うか」と。力めて不可なりと陳す。動して上(英宗)曰く、「然らば則ち此の位 竟に太子に傳えんか」と。[李]賢 叩頭して謝して曰く、「宗社 幸いなること甚だし」と。遂に旨を傳えて召す。太子 須臾にして至る。[李]賢 曰く、「殿下の事 定まれり。趣(すみやか)に入りて謝せ」と。太子 上(英宗)の足を抱き對えて泣く。讒 遂に行われず(『洵詞記事抄』明臣十節・「李賢定太子」条・拾葉)。

『吾學編』も同じように伝える。

時に禁中、讒言有りて謂う、「茂陵(憲宗成化帝)は、宜しく復た東宮に在るべからざる者なり」と。上(英宗)之を疑う。一日、上(英宗)不豫たりて便殿に臥す。公(李賢)を召して論して曰く、「今、庶事 頗る寧なり。而して大なる者(皇位継承)反って搖す。奈何せん」と。公(李賢)頓首して地に伏して曰く、「此れ國本なり[だから、変更されることはいけません]」と。上(英宗)曰く、「然らば則ち必ず太子(憲宗成化帝)に位を傳えんか」と。公(李賢)又た頓首して賀して曰く、「宗社 幸いなること甚だし」と。上(英宗)起立して召す。太子(憲宗成化帝)至る。公(李賢)太子(憲宗成化帝)を扶して曰く、「謝●(一字不明)せよ」と。太子(憲宗成化帝)上(英宗)に謝し、上(英宗)の足を抱き泣く。上(英宗)も亦た泣く。讒 竟に行なうを得ず(『吾學編』第三十六・皇明名臣記第十五卷・「太師李文達公」条・四葉)。

ただし、『國史唯疑』は、この『吾學編』を節略して引用し、訛傳であろうという。

『吾學編』(『吾學編』第三十六・皇明名臣記第十五卷・「太師李文達公」条・四葉)に[以下のような記]載あり。英廟 晩に東宮を易えんとするの意有り。頼 文達(李賢)の力に頼り、太子を召し至らす。[太子]、趣(すみやか)に謝し、上(英宗)の足を抱●(一字不明)し泣く。讒(奸邪、奸)始めて行なわれず、と。按ずるに、事 經見すること鮮し(ふつうにあることではない)。太子 初め景泰に廢せられ、復辟して始めて還る。再び動揺するに堪えんや。英廟の末、宦侍を馭すること峻なりて、后宫 靜謐なり。詎ぞ奪嫡の謀有らんや。疑うらくは訛傳ならん(『國史唯疑』卷之三・「正統 景泰 天順」)。

「見濡」に改名している⁴⁾。この天順元年は、憲宗成化帝（この時かぞえて十一歳であった）が皇太子に再度立てられた時（天順元年三月六日冊立）である。

天順丁丑（元年）、英宗睿皇帝 衆の擁戴する所と^な爲りて復辟し、景泰帝を廢して仍お邸王と^な爲し、上（憲宗成化帝）を復立して皇太子と^な爲す。上（憲宗成化帝）初名は「見深」なり。是に至り名を「見濡」に^{あらた}更む。詔書に其の故を^か寫くを^{わす}失れ、天下に頒行す。人皆な驚きて相い問いて曰く、「此れ向に立つ所の太子に非ざるか。何ぞ名の同じからざるや」と。蓋し上（憲宗成化帝）天下の人心の歸向（人々が心を寄せる）と爲ること久しければなり……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一・「卷首」）。

天順丁丑（元年）、英宗は人々の推戴するところとなって帝位に返り咲いた。そして、景泰帝を廢してもとの邸王とし、上（憲宗成化帝）をふたたび皇太子にたてた。上（憲宗成化帝）の初名は「見深」であったが、ここにいたって名を「見濡」に改めた。詔書に改名のことを書かず、天下に頒行したため、人々は皆な驚いて、「これは最初に立たれた皇太子さまではないのだろうか。どうして名前が違うのか」と問い合ったという。このように心配したのは、おそらく、それほど上（憲宗成化帝）に対して、天下の人々が心を寄せていたためであろう、という。

この「深」から「濡」への変更は、どのような意味が込められていたものであろうか。なお、一字目の「見」と二字目に水偏を用いることがこの排行に共通するものであったようだ。

この出據については、憲宗「實錄」に言及されていないので、はっきりしないが、『周易』未濟卦に基づいたのではないかと推測できる。

その『周易』未濟卦・卦辭と彖辭には、つぎのようにある。

未濟、亨。小狐汔濟，濡其尾，无攸利（未濟，^と亨。小狐 ^{ほと}汔^{わた}んと^ぬ濟る。其の尾を濡らす。利する^{ところ}攸なし）。

彖曰。未濟，亨。柔得中也。小狐汔濟。未出中也。濡其尾。无攸利。不續終也。雖不當位。剛柔應也（彖に曰く、「未濟，^と亨」とは、柔 中を得ればなり。「小狐 ^{ほと}汔^{わた}んと^ぬ濟る」とは、未だ中を出でざればなり。「其の尾を濡らす。利する^{ところ}攸なし」とは、^{つづ}續いて終えざればなり。位に當らずと雖も、剛柔 應ずるなり）。

小狐が川を「濟」ろうとしたものの、尾を「濡」らしたためにわたりきることができなかった、という意味であろう。『周易』の解釈は様々であり、理解しにくいのであるが、字面だけをみて行くと、「濟」が「濡」のために目的を遂げられなかったと理解できる。つまり、『周易』未濟卦を踏まえて、景泰帝が立てた皇太子「見濟」は、英宗の立てた皇太子「見濡（もともとは見深）」のために皇太子の地位を全うできなかったことを示そうとしている、と考えられないだろ

4) 管見のおよぶかぎりでは「實錄」には、いつ改名されたかについてはっきりと記されていない。ただ、天順元年二月乙未朔の「皇太后制諭」の中では、「皇帝長子見深」とある。また、天順元年三月六日の皇太子冊立の詔には、「天順元年三月初六日、冊立元子見濡為皇太子」とある。すると、改名は、二月一日から三月六日までの間に行われたか、もしくは皇太子冊立と同時にされたかと推測できる。

うか。

すると「見深」から「見濡」への改名は、英宗の景泰帝への意趣返しの意味と取ってもかまわないのではないか。

奪門の変以後の政治状況については、趙現海氏が「天順時期政治群體的制衡与宮廷政治變遷」(中国社会科学院歴史研究所明史研究室編『明史研究論叢』第十四輯・15頁～61頁・2015年刊所収)においてくわしく検討を行なっておられる。

(つづく)